高尾山報 令和3年5月号 毎月1回発行 通巻第688号

令和3年5月号

高尾山報

梯子（はしご）乗り 春季大祭 空に舞う

法の水茎 (107)

大正大学講師　髙橋秀城

時鳥
聞く折にこそ
夏山の
青葉は花に
劣らざりけれ
（西行『山家集』）

六家集本）
（時鳥の鳴き声が響き渡る折こそ、夏山の青葉は桜の花に引けを取らないよ）

水を張った早苗田を見下ろすように、鯉のぼりが悠々と泳いでいます。遠くの景色に目を移せば、春は桜によって霞んでいた山並も、今はくっきりと青空に照り輝いています。

新緑が眩しい野山に分け入れば、鳥たちも元気よく囀っているでしょう。古くから初夏の訪れを告げる鳥として親しまれてきた時鳥の声も、どこからか聞こえてくるかもしれません。春に桜を愛でた道を今一度歩きながら、生命の息吹を全身で感じてみてはいかがでしょうか。

高野山
仏法僧の
声をこそ
待つべき空に
鳴く時鳥
（三条西実隆『高野参詣日記』）

（高野山で仏法僧の声を待っていると、空に聞こえてくる時鳥の声よ）

この歌は、室町時代後期の歌人、三条西実隆（一四五五～一五三七）が、和歌山県にある真言宗の聖地、高野山金剛峯寺にお参りした際に詠んだものです。「仏法僧」は、仏教で重んじる「三宝」（仏・法・僧）の教えでもあり、日本に五月末頃に飛来する「仏法僧」という鳥の名前でもあります。仏法僧鳥は「三宝鳥」という別名も持ち、弘法大師空海（七七四～八三五）の『性霊集』に「後夜に仏法僧の鳥を聞く」（暁に仏法僧の声を聞く）とも見える霊鳥です。

ちなみに、仏法僧鳥は美しい鳥ですが「ぶっぽうそうそう」とは鳴かないそうです。時は移り昭和十年（一九三五）に至って、かわいらしく「ぶっぽうそう」と鳴く声の主が、実はフクロウ科のコノハズクと判明しました。それ以来、古来より信じられてきた瑠璃色の仏法僧鳥を「姿の仏法僧」、コノハズクを「声の仏法僧」と呼び分けるようになったそうです。

「夏山」という言葉には「夏の季節に、高い山頂などにある神社・仏閣に参詣する」という意味もあります。参詣は「神仏にお参りに行くこと」で、「物詣で」とも言い、「参拝」「巡礼」と似た意味合いです。

参詣には、和歌が付きものです。それは、御詠歌（巡拝歌）といった信仰と深く結び付くものから、参詣の途中で立ち寄った名所旧跡を詠ったものまで様々です。少し細かくなりますが、神仏に歌を奉る法楽和歌（奉納和歌）や、神社仏閣に参籠（お籠もり）中に神仏が夢枕に立ち顕れるという託宣歌（神仏歌）、仏さまとの縁（仏縁）を結ぶための結縁歌（勧進歌）などもあります。仏さまの教えを込めた歌）や和讃（仏さまを和語で讃嘆した歌）なども広く仏教に関わる歌（釈教歌）として捉えられるでしょう。信仰と和歌との結び付きは、時代による流行はあっても、今日まで脈々と受け継がれています。

先ほどの「高野山」の歌を詠んだ三条西実隆は、夏の高野山に登る途中、新義真言宗の総本山である根来寺にも立ち寄っています。その時の様子は次のように記されています。

根来に到着すると、お寺の僧侶十数人が迎えにやって来ました。旅の疲れもあったので、輿（乗り物）に乗って大門の中に入りました。

寺に着くと、さっそくいろいろなお堂を参拝しました。根来寺は想像以上に見所が多く、本堂（伝法院）の御前では思いを巡らして、

高野山
別れて来しも
ことさらに
法を伝へむ
代々の為かも
（高野山から別れてきてこの地にお寺ができたのも、あえてそれぞれの世に仏法を伝えるためなのだ）

次に、錐もみ不動明王を拝見して、

動きなき
身を分けてける
姿そと
血の涙をも
流してぞ見る
（不動の強固なお身体を（覚鑁上人の身代わりとして）斬られてしまったお姿と、深い悲しみの涙を流して拝することよ）

覚鑁上人の『続後拾遺集』に入った「**夢の中は夢も現も夢なれば覚めなば夢も現とをしれ**」（無常の世の中では、夢も現実も夢である。悟りを得て目覚めたならば、夢も真実であったと知りなさい）という詠歌が思い出されて、

いつ覚めん
現も知らず
七十の
今日だに同じ
夢の世中
（いつになったら夢から目覚めるのだろう。真実も知らずに七十歳になった今日でさえ、まだ同じ夢の中にいるよ）

（『高野参詣日記』）

実隆は、行く先々で歌を詠じました。根来寺では、本堂や興教大師覚鑁（一〇九五～一一四三）の身代わりとなったという伝説を持つ「錐もみ不動明王」の前で歌を詠み、覚鑁の歌を手本としながら、夢のような無常の世に生きる自分自身の齢も重ねています。実隆の高野山参詣は、信仰の旅とともに、先人の恩徳を偲びながら、自分と向き合う旅でもあったのです。

実隆が旅をしてから約十年後のこと。息子である三条西公条（一四八七～一五六三）もまた高野山に詣でました。その旅路を記した『吉野詣の記』には、やはり旅の道々で詠んだ和歌が書き留められ、高野山が近づくと父を夢に見、父の忌日に高野山をお参りしたことも記されています。

公条は『吉野詣の記』の末尾を、

老の坂
上り下るも
このたびを
限りと思ふに
深き山道
（老いた身で上り下りしてきたが、これが最後と思うと、心に深く残る山道の旅だったよ）

現世の望みも、来世の縁も、この旅で満足するものとなりました。

（『吉野詣の記』）

と締めくくっています。この歌はかつて父実隆が高野山中で詠んだ、

老の坂
苦しきをこそ
凌ぎしに
など雨風の
身を砕くらん
（『高野参詣日記』）

（老いた身で苦しみを乗り越えてきたのに、どうしてさらに雨風がこの身に打ち付けるのだろう）

という歌に思いを馳せてのものでしょう。時を隔てた親子の参詣道は、和歌によって結ばれた「心の道のり」として生き続けていたのです。

（栃木北部教区普済寺）

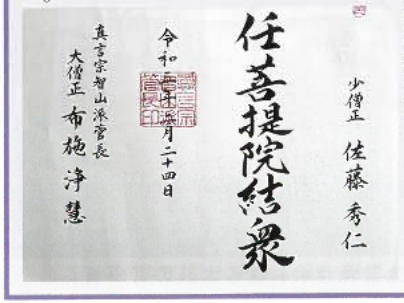
鳥たちも元気よく囀る（写真提供：髙岡輝幸氏）

慶祝　佐藤御山主菩提院結衆に列座

四月八日、真言宗智山派総本山・智積院において、新たに菩提院結衆の辞令親授式が執り行われ、当山の佐藤御山主が、布施浄慧管長猊下より辞令を授かり、新たに菩提院結衆に就任されました。

菩提院結衆とは、新義真言宗の始祖である興教大師（覚鑁上人）が入滅された後、毎年御命日の十二月十二日に、根来寺の高僧が報恩謝徳の為に菩提院に結衆して、教学が論じられたことに由来します。

現在でも、根来伝来の教えを継承し、その恩に報いるため、全国より多くの僧侶が出仕して、報恩講が勤修されております。



子供たちの健やかな成長を祈る

春季大祭奉修

四月十八日(日)

健(すこ)やかな成長を願い、誕生仏が祀られる花御堂にお祈り

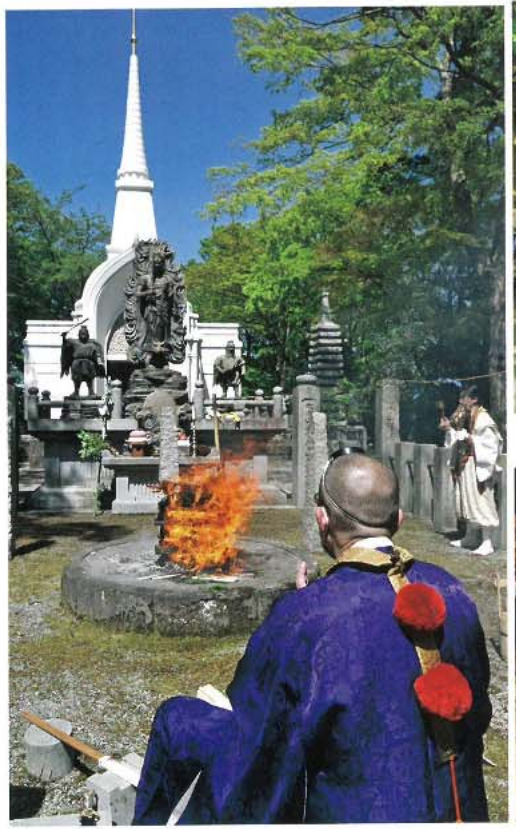
家族そろってハイチーズ

地元の浅川中学校によるブラスバンド

絹太鼓保存会による太鼓の音が響く

熱祷(ねっとう)する佐藤御山主

氷川神社獅子舞保存会による厄払い



有喜苑における柴燈大護摩供

八王子消防記念会による勇壮な纏(まとい)振り

大本堂内で御詠歌を奉詠

観音菩薩の宗教 ㊶

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子（その4）

これまで三回にわたり、『日本書紀』や『聖徳太子暦傳暦』（以下『傳暦』）に記された聖徳太子を見てきた。当初、飛鳥時代の歴史的偉人として記述された聖徳太子は、平安時代にいたると宗教的に昇華された姿で描かれるようになった。ことに平安時代には聖徳太子を観音菩薩の化身、転生者として尊崇する思想が文献のうえで確立していたことを見た。

聖徳太子と観音菩薩との関係は、聖徳太子の薨去直後から見られた。すでに見たように、法隆寺の救世観音は「上宮王等身観世音菩薩」（『東院資材帳』七六三年）と伝えられ、聖徳太子の身長に合わせて作られた観音像とされている（拙稿「観音菩薩の宗教⑬」）。しかしながらその像は観音像であり太子の肉身ではなかった。一方、平安時代になると『傳暦』のごとき文献資料のみならず、聖徳太子と観音菩薩を結びつけた上での聖徳太子の肉身を写した造像が始まる。

法隆寺に伝わる重要文化財指定の木造聖徳太子坐像は、制作年が判明しているものでは最古の太子像の作例とされる。その胎内には以下の墨書銘が記されている。

「唵呵嚧哩迦娑婆哥
仏師僧円快　絵師秦致貞　敬白　奉造顕聖徳太子御童子形御影　高三尺六寸一躰事　右始自太子生年壬辰及治暦五年五百五歳来仍為自他法界共成仏道法隆寺大衆為結縁所奉造顕也如右敬白　治暦五年　歳次己酉　二月五日」（『日本絵画史年紀資料集成　十世紀―十四世紀』東京文化財研究所、一九八四年。なお、上記引用では筆者が適宜スペースを入れた）

それらによれば、この像は聖徳太子の童子時代の姿で、治暦五年（一〇六九）に仏師の僧の円快とともに絵師の秦致貞（もしくは秦到眞とする資料もあり）が共同で造ったことが知られる。両者の職能より見れば、太子像作成において円快が像を造り、秦致貞は彩色を担当したと考えられる。

造像の来歴について右の漢文を読み下すと、「右、太子の生年壬辰より始め、治暦五年五百五歳来に及び、仍りて自他法界共に仏道を成ぜんが為、法隆寺の大衆、結縁して造顕し奉る所と為す也。右の如く敬って白す」と読めよう。その意味するところは、以下の通りである。

「太子が生まれた壬辰より五百五年が経ち、そのためにあらゆる衆生が仏道を完成して成道するために法隆寺の僧たちが（仏菩薩や太子と）縁を結び、この像をお造りしたものである」。

右に作者として名を銘じられている円快は、信貴山の僧で浄如房と称したことが知られるが（『法隆寺別当次第』一三六〇年）、彼の詳しい経歴は明らかでない。信貴山は聖徳太子が開創したと伝わる朝護孫子寺などを擁する毘沙門天信仰の総本山である。伝承によれば聖徳太子が排仏派の物部守屋を討つ際、毘沙門天が信貴山より現れて太子に戦勝の秘法を授けたとされる。戦いに勝った太子はこの山を「信ずべし、貴ぶべき山」と名付けたという。これが信貴山の名の謂れである。代々「快」はこの寺の住職や僧侶の通字となっており、太子ゆかりの信貴山の仏師・円快が尊崇の念をこめて太子像を制作したことは疑いを挟まない。

もう一人の作者と記される秦致貞は、法隆寺献納宝物の『聖徳太子絵傳（以下、絵傳）』（国宝、東京国立博物館蔵）を描いた絵師である。その後、彼の『絵傳』に基づき室町時代までに四十数点の太子絵傳が描かれた。それらの各種『絵傳』に描かれた代表的場面は百十九を数え、一部を除きそのほとんどは『傳暦』に記述されている内容の図様化と同定されている（菊竹淳一編『聖徳太子絵伝』日本の美術12、至文堂、一九七三年）。このうち、秦致貞の『絵傳』は現存する最古のもので、上記の聖徳太子像の制作年と同じ延久元年と伝えられている。治暦五年は四月に改元し延久元年となっており、西暦ではともに一〇六九年である。

したがって、円快と秦致貞の二人が法隆寺の聖徳太子坐像を制作したのに続き、秦致貞は同年の改元後に法隆寺の『絵傳』を描いたことになる。『絵傳』はその後、行基菩薩・弘法大師・法然上人・親鸞上人・一遍上人などの聖人絵をつくり出し、日本仏教絵画史の上に一つの分野を確立する先駆的役割を果たしたという点できわめて重要である（菊竹淳一、前掲書）。

『傳暦』にしても『絵傳』にしても、歴史的な聖徳太子よりも、信仰の対象としての超人的な聖人たる太子を描いており、坐像もまたそうした精神的背景のもと造られた。その証左となるのが、墨書銘の冒頭に見える観音菩薩の真言「唵呵嚧哩迦娑婆哥」である。

聖徳太子が創建したと伝えられる朝護孫子寺
信貴山　朝護孫子寺公式ホームページ　プレス用画像集より
（http://www.sigisan.or.jp/）

アジア全域を鳥瞰すると、観音菩薩の真言は「オーム・マニ・パドメー・フーム」がもっともよく知られてきた。ことにチベットやモンゴルでは現代に到るまで僧俗・官民等の差なく広く唱えられている（拙稿「観音菩薩の宗教」②⑤参照）。この真言は観音菩薩の功徳を説いた大乗経典『カーランダヴィユーハ・スートラ（Kāraṇḍavyūha Sūtra）』に説かれたもので、宋代の漢訳『仏説大乗荘厳宝王経』（天息災 Devaśanti 訳）があるものの、一部を除き東アジアでは膾炙しなかった。

これに対し日本を含む漢字仏教圏では、「蓮華部七字心真言」「観音菩薩蓮華部心真言」「滅業障真言」「観音菩薩蓮華部心真言」などと呼ばれる上記の「唵呵嚧哩迦娑婆哥」が観音菩薩の真言として広く唱えられてきた。この真言は原語でわずか三語の「オーム・アーローリク・スヴァーハー（Oṁ ālolik svāhā）」で構成され、日本では転訛して「オンアロリキャソワカ」と発音されている。この真言は「経軌の随所にある普遍的な呪」で（田久保周誉『真言陀羅尼藏の解説』鹿野苑、一九六〇年）あるものの、その意味は正統サンスクリット語からは容易に解釈できない。オームとスヴァーハーは聖なる語で通常は翻訳されないから、問題とすべきはアーローリクの一語である。語尾に母音を欠く ālolik は正統サンスクリットの語彙には見出せず、完全な語形である ālolika を隠密語にするために a を省略したものと推定されている（田久保、前掲書）。田久保周誉によれば、この語は「泥土」を意味する女性俗語形アーローリー（ālolī）から派生したアーローリカ（ālolika）で、「泥土から生ずるもの」を意味する（前掲書）。アーローリカは上記同様、語末に母音を欠いている。すなわち観音菩薩の象徴を象徴する蓮華の謂である。観音菩薩の真言は観音信仰の隆盛を反映して、六十あまりの経典・儀軌に「夥しい数」の異伝がある。田久保によれば Oṁ ālolik svaha は蓮花部心真言とも呼ばれ、観音菩薩専有の真言ではなく、蓮華部諸尊の召請に共通して唱えられたとされる。これらを勘案して田久保はこの真言を「唵、蓮花部尊よ、娑婆哥」と翻訳した。ただし、この真言は主として観音菩薩への供養・祈願に唱えられてきた。

円快・致貞による聖徳太子坐像の墨書銘の冒頭にこの真言が書かれていることは、聖徳太子を観音菩薩と一体化して尊崇したことの証拠とまでは言えないが、宗教的に密接な両者の関係を示すことは疑いない。

高尾山来山者安全祈願祭厳修

四月三日（土）

四月三日（土）、高尾登山電鉄清滝駅前において、登山安全・疫病退散等の諸願成就を願い、「来山者安全祈願祭」が行われました。

伊勢丹立川支店の皆様や、高尾山商店街の関係者が温かい日差しを浴び、飯縄権現遥拝社御宝前にて佐藤山主御導師のもと、高尾山へ参拝、または登山される方々の安全を祈る法楽があげられました。

その後、ケーブルカー清滝駅前に移動して柴燈大護摩供を厳修し、来山者の安全と共に、新型コロナウイルスによる感染症流行が終息し、以前の元気な高尾山に戻れるよう、参列の関係者一同と共に祈念されました。

新型コロナウィルスの終息を祈念する

高尾山を訪れる方の安全を祈る

開瀑式厳修

四月一日（木）

高尾山には、蛇滝及び琵琶滝という二つの水行道場があり、毎年四月一日には両道場において、滝場における一年間の安全を祈願する開瀑式が行われております。

蛇滝（左）と琵琶滝で滝行の安全を祈願する

花まつり（釈尊降誕会）

四月八日（木）

お釈迦様生誕の日と伝わる四月八日には、日本各地でお釈迦様の誕生を祝福する、「花まつり」が行われております。

高尾山には、昭和六年（一九三一）タイ王国より、日本ボーイスカウト連盟が「健児の仏舎利」として拝受した、お釈迦様の真身骨を安置する仏舎利塔が有喜苑にあります御縁から、本年も菅谷執事長御導師のもと、仏舎利塔において花まつり法要が厳修され、花で飾られた「花御堂」の中に立つお釈迦様の誕生仏に甘茶が灌がれました。

お釈迦様の誕生仏に甘茶が灌がれる

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・一年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・一日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の
（身体健全
寿命長久）を祈念して
福壽圓満の
御護摩を
お申し受け致しております。

三代句碑法楽会

四月二十日

四月二十日、俳人の星野椿先生と御子息の高士先生（俳誌『玉藻』主宰）が、玉藻の会員の方と共に来山され、境内の天狗像脇にて「星野家三代句碑法楽会」が執り行われました。

この場所には、明治時代の俳人・高浜虚子の次女である、星野立子先生と椿先生、高士先生の親子三代に渡り、次の俳句が刻まれた句碑を建立されております。

春風にのり　大天狗　小天狗　　立子

春風や　森羅万象　瑞々し　　椿

富士道といふ　古道にも風光る　　高士

句碑の前にて撮影する高士先生(左)と椿先生

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる 17

明治大学博物館　外山　徹

十世 堯秀 1　寛永の再興（上）

豊臣家滅亡を見届けた翌元和二年（一六一六）、大御所徳川家康は死去。すでに将軍を継いでいた秀忠の治世下においては、松平忠輝（越後高田藩）、福島正則（広島藩）、最上義俊（山形藩）といった大大名の改易が相次ぎ、幕府に対する脅威は着々と取り除かれていった。また、江戸城の建設は外周部に至り、郭内には武家屋敷の整備が進んだ。そして、商人・職人が集住する町並みも形成されていった。

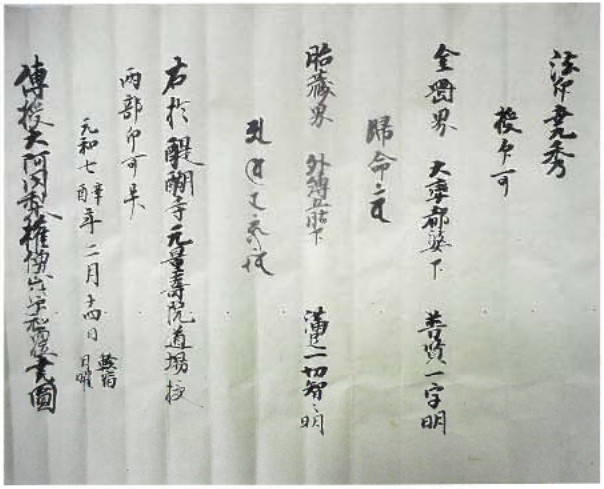
一〇世堯秀の晋山

元和六年（一六二〇）を晋山の年とする高尾山一〇世堯秀の在住時には、ようやく高尾山の様子が知れる史料が残り始めるが、この代替わりはいろいろな要素から、新たな時代の到来として理解することができる。

堯秀が醍醐無量寿院正嫡の堯圓から伝法灌頂を受けたという、元和七年二月一四日付の印信（伝法の証書）が遺されている。中興俊源以来、歴代の山主が醍醐の系譜にあることは、天正期（一五七三～九二）と推定される血脈に示されているものの、九世源恵の代までに醍醐寺との間でやり取りされた文面は、わずかに前回言及した慶長一八年（一六一三）付で熊野系山伏への諸役を禁ずる醍醐三宝院宛の書面のみで、これとても伝世の経緯は不確かである。

しかし、堯秀の伝法灌頂は醍醐寺側にも同じ日付で田中坊において「武蔵国高尾山有喜寺堯秀」が付法を受けた旨の記録がある。堯圓による付法記録なので、印信にある無量寿院を道場とする解釈でよいだろう。ところで、伝法灌頂の元和七年は堯秀晋山の翌年ということになる。晋山の年は後年の記事に拠るので確度は低いが、印信の元和七年付がわかっていたとすれば、堯秀はその以前から高尾山に住持していたとする理解だったのだろう。しかし、堯秀には九世源恵との師弟関係を具体的に示す史料がない一方、堯秀の名は堯圓との密接な師弟関係を印象付ける。

寛延三年（一七五〇）に作成された高尾山縁起が飯縄大権現の祭祀に係り「堯秀以遷、ただ承けて醍醐の法を守り、ともに医王（薬師如来）を尊崇するのみなり。飯縄の法を伝うと言えども、あえてその業に留めず」と記しているのは、この認識が的を射ているかは別にしても、醍醐寺の直系としての堯秀から新たな体制が始まったという理解があってのことだろう。歴代山主の墓塔が堯秀から始まっていることもそれを示唆している。やはり九世源恵在住時は「それ以前の時代」という感が強い。



堯秀が醍醐無量寿院堯圓から授かった印信
写真提供：法政大学図書館

醍醐派の拠点寺院

堯秀の伝法灌頂について醍醐寺側の史料で注目すべき点は「秘密道具所望」と記されていることである。これは灌頂の儀式をおこなうのに必要な道具類のことで、この記事に符号する「宝冠」「白払」その他八種の道具を書き上げた元和七年四月二八日付の目録が薬王院文書に遺っており、堯秀

の確かな足跡が感じられる。これら道具の授与は雛形が下附されて末寺の側があつらえるのが実際だったとされているが、堯秀が授かった道具類について高尾山縁起は「その器各々銘あり」と述べており、目録の「右あい渡すところ件の如し」という文言とともに、実際に古器物を授かった可能性を示唆している。このことは、醍醐無量寿院が関東における教線拡大の拠点として高尾山有喜寺を積極的に位置付けたことを意味するのではないか。

それから、これまで見てきた文書には専ら高尾山有喜寺の名称が記されるばかりで、「薬王院」の院号が見当たらなかった。この院号の初見は正保四年（一六四七）で、堯秀在住の末期である。院号・寺号の付与もまた本末関係の中でなされる性格からすると、状況証拠に止まるものの、やはり堯秀と醍醐寺との関係強化が考えられる。これは、寛永期（一六二四～四四）における、寺院本末関係の再編を促す幕府の政策を請けて、無量寿院が堯秀の在住する高尾山有喜寺との関係を強固なものにしようとした意図と考えることもできる。

高尾山中の通り抜け取締りにかかわる幕府老中による書面

寛永八年という年

久しく歴史の霧の彼方に没していた高尾山であるが、寛永の年号とともにその動静が明らかになり始める。同八年（一六三二）、いささか唐突にその姿が史料上に現れる。

高尾山周辺を管轄する幕府代官岡上甚右衛門を宛所とする九月二一日付の書面の写しが薬王院文書に遺る。そこには、高尾山への参詣者に紛れて山中を通り抜ける者があるので、女ならびに手負いその他不審な者を通さないようにという指示と、通ろうとした者を捕らえた際には褒賞する旨が記されている。ほんの一言のことであるが、この時期高尾山に逃亡者が紛れ込める程度の参詣者が存在したことが示されている。

文書の差出人として八つの官職名が列記されている。（左から）雅楽頭は酒井忠世、大炊頭は土井利勝、讃岐守は酒井忠勝と、以下幕政の中枢を担う錚々たる面々による発給は、この高尾山中を通過する者の存在に幕府がよくよく関心を向けていたことを示している。つまり、甲州道中を江戸方面から西へ向かい、小仏峠の手前にある駒木野の関所を忌避して山中を迂回しようとする者に対する取締りである。同じ日付で箱根をはじめ関東一円の関所に厳重な取締りが下令されている係りで発給された文書であるが、もし謝礼を申しかけられれば、その倍額の褒賞を出すとするなど、大名家の婦女子の帰国や犯罪人の逃亡阻止に幕府が神経をとがらせていたことがわかる。

書面の裏側には、後筆ながら高尾山では裏門にて参詣者が通り抜けないよう差し止めるようにと岡上から書面の写しを受け取り、所持している旨の記載がある。江戸後期の高尾山内を描いた絵図では、現在の四天王門から大本坊にかけての平地は門と柵で完全に閉ざされ、さながら関所の構えという雰囲気だが、すでに門構えをともなう伽藍が再興されていたということだろうか。

《参考文献》藤井雅子『中世醍醐寺と真言密教』（勉誠出版、二〇〇八）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

高尾小物語 37

金比羅台

絵・橋本豊治

山麓の不動院前から表参道（一号路）を登ってゆくと、現在は涸れている布流滝（古滝）に行き当たります。そこから金毘羅台まで、七曲と呼ばれる、つづら折りの坂道が続きます。

布流滝から登ると、舗装された道と、階段の有る道の二方向に分かれます。後者の道へ行くと、鎖行場が現れ、更に進むと金毘羅社が鎮座する、金毘羅台という場所にたどり着きます。

金毘羅台からは都心方面が一望でき、この一帯はかつて、文政五年（一八二二）に刊行された『新編武蔵風土記稿』では、「高尾十勝」（山内十カ所が景勝地として紹介されている）の一つ、「七盤嶺」と呼ばれておりました。

この場所はまた、山麓の落合地区の、小名路交差点から始まる登山道とも合流する平地となります。大正時代頃までは、「大見晴亭」という茶屋がありました。

高尾十勝

薬王殿（本堂）、威神台（飯縄権現堂）、白雲閣（旧書院）、紫陽閣（山頂）、海嶽楼（末寮）、望墟軒（末寮）、琵琶滝、鳴鹿澗（琵琶滝上流）、雨宝陵（琵琶滝上流）、七盤嶺　※いずれも読み方は不詳です。

いろは天狗の落し文 ④

に

憎むことせず憎まれぬこと　心豊かに大らかに

人は誰しも長所と短所を、併せ持っているのものです。誰かに嫌悪感を抱き憎んでしまうのは、その短所ばかりに気を取られているからではないでしょうか。同様に、人から憎み嫌われるというのも、自分自身の欠点に原因があるのかもしれません。

憎んだり憎まれたりを続けていても、いやな気分になり、体調も崩れてしまいます。難しいことではありますが、心を開いて他人の短所を受け入れ、自分の欠点を直す努力を続けることで、自分も、周囲の人々の心も体も、豊かになることでしょう。

いけばなの心 ⑮

華道教授　佐藤　宗明

今年は少し春らしい、過ごしやすい時期が長い気がします。まさに『風薫る』時期ですね。過ごしやすい時期が長く続いて欲しいとは思いますが、ここのところ、そんな時期が減ってきた気がします。冬の厳しい寒さから、『暖かく』なったかと思ったらすぐ『暑く』なってしまいます。

やはり、人は暑くなってくれば『涼』を感じるものを求めます。生け花の花材も同様で、これから夏に向けては涼し気な花材、生け方になってきます。今回から数回は水辺の雰囲気を感じる作品をご紹介したいと思います。

この作品はフトイと、河骨を使った生花正風体二種生けです。どちらも水生の植物で、池坊的な花材区分では『水物』と言われるものになります。

水辺に生える植物なので、花器も水がよく見える、口の広いものがふさわしいと言われます。

フトイは群生するものなので、生ける本数も多くなります。それでも窮屈な感じではなく、茎と茎の間に涼し気な空間を作り出す事が、フトイを生けるポイントとなります。この作品では同じ水物の河骨を根締にあわせて、水面に流れる風を表現してみました。

まだ過ごしやすい日が多いかと思いますが、夏に向かう中で、暑い日に涼し気な作品で涼を取って頂ければと存じます。

花材：フトイ、河骨

折り折りの記 (141)

衣更へにし薬王院の新貫首

波多野　重雄

高尾山の春の朝晩はとりわけ寒い、冬から春にかけて着用した厚手の着物も、春になり薄手の物に着更えることを衣更えと言ふ。

昔から四月朔日と十月朔日を衣更えの日として着物、調度を取り更えるのを例とした。同時に冬の綿入れから袷となり次いで単衣、更に盛夏には羅へと日を決めて更えたものである。

特に偉丈夫である、佐藤御貫首の颯爽たる姿は微笑ましい。高濱虚子の「**百官の衣更へにし奈良の朝**」という句が、日本風土の季節変遷を齎す優雅なたしなみが、馨しく言い得て妙である。

（高尾山健康登山の会会長）

奥地利国歌

ローレンツ・レオポルト・ハシュカ（漢訳：荒井一雄）

神護我們皇
栄光善良帝
長寿幸運皇
神護善良帝

厚木市　荒井　一雄

うぐひすの
声をもとめて
高尾山

オーストリア国歌

神よ、我等のフランツ皇帝を
護らん！
栄光に包まれた善良なる
フランツ皇帝を！
フランツ皇帝様、どうぞ幸福に
長生きしてください！
神よ、我等の善良なる
フランツ皇帝を護らん！

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」

蚕起食桑
「かいこおきてくわをはむ」

五月二十日～五月二十五日頃

卵から孵化した蚕が、桑の葉を盛んに食べだす頃を意味します。

蚕は絹の原料となる繭玉を紡ぐため、人々に大事にされ「おかいこさま」とも呼ばれておりました。

八王子市も、古来より養蚕業や織物業で栄え、「桑都」と称せられております。

今月の風物詩
薔薇

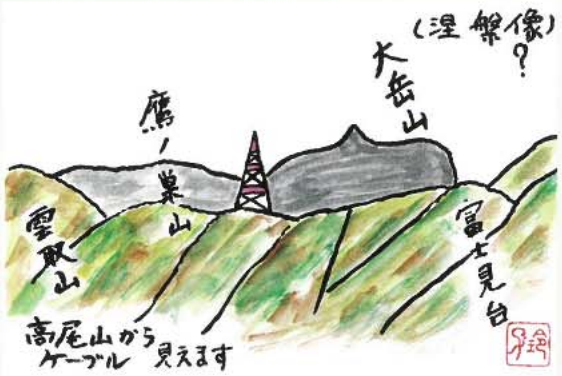
薔薇は観賞用として改良され、年間を通して花を咲かせる品種が多いのですが、本来は初夏、または秋に開化する植物でした。

鑑賞用以外でも、精油を抽出した「ローズオイル」や食用に、また日本に自生していた種等は、薬用にされてきました。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「まるで涅槃像のよう」

八王子市　栃谷玲子　様



一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

百段　何かを始める前から諦めない

誰しも初めての試みを実行に移す時は、不安なものです。消極的になってしまい、諦めてしまうこともあるかもしれません。それでもやらなかったことを後悔しないように、挑戦する気概を持ちつづけていたいものです。

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて、頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

おはなし散歩道

かしわもちたろうくんの修行

柏市　木村　研

たろうくんは、入学式の写真を持ってお母さんと一緒に、おばあちゃんのうちに行きました。

おばあちゃんは、たなの上のおじいちゃんに写真を見せて、

「大きくなったでしょう」

と、言いました。

仕事が終わったら、夜、お父さんも来ます。

おばあちゃんのうちは、高尾山のふもとにあります。

たろうくんは、明日、お父さんと高尾山に登ります。

お父さんが、

「ちゃんと一人で歩けるのか？」

と、聞きました。

「大丈夫。一年生だもん」

たろうくんは、胸を張って答えました。

晩ごはんは、お母さんが作ります。

お母さんが買い物に出かけると、たろうくんは、おばあちゃんに、

「明日、お父さんと高尾山に登るから、修行しなくちゃいけないんだ」

と、いいました。

「修行？　大変だこと」

「だから、お腹すいちゃうと思うんだ。ねえ、おやつくれない？」

「はい。はい」

おばあちゃんが手作りの柏もちを用意してくれると、たろうくんは、

「ケーキのほうがいいな」

と、いいました。

「こまったねえ。でも、修行に行くんだろう。柏もちは、病気や事故から守ってくれるんだよ」

しかたがありません。

たろうくんは、柏もちを、ぱくぱくっと食べて、

「修行をするには、刀もいるなあ」

と、いいました。

「そうか。鞍馬山の牛若丸も天狗さんと剣術の修行したもんね」

おばあちゃんは、新聞紙を長く丸めて、

「この刀で、天狗さんと修行をしていらっしゃい」

と、いいました。

「天狗さんと？」

「高尾山には天狗さんがいるから、なんでも教えてくれるよ」

おばあちゃんが、にこっと笑いました。

たろうくんは、天狗さんの話しを聞いているうちに、なんだか怖くなってきました。

大きな木の上から天狗さんが襲いかかってくるような気がします。

「上から襲われると危ないなあ。ぼく、ぼうしを持ってこなかったから、修行やめようかな」

「そんなら、かぶとも作ってあげるよ」

おばあちゃんは、新聞でかぶとを作って、頭にのせてくれました。

「これなら大丈夫。さあ、行ってらっしゃい」

しかたがありません。

たろうくんは、庭で準備体操をして、それから、刀を抜いて、

「えい」「えい」「えい」

と、素振りをしました。

たくさん素振りをして、

「ああ、つかれた」

と縁側に座ると、干した布団が山のように積んでありました。

三人分の布団です。

ふっくらした布団の山は、高尾山のようです。

たろうくんは、

「よーし、布団の山で修行開始だ」

と、布団の山に上って行きました。

＊　＊

「あらあら、こんなところで寝ちゃって」

買いものから帰ってきたお母さんが、あきれたようにいいました。

たろうくんが、布団の山で気持ちよさそうに寝ていたからです。

「あらあら。柏もちたろうさん、修行は、もう終ったの？」

おばあちゃんが聞くと、たろうくんが目をあけて、

「うん。ふかふかの布団の山で、修行したから、もう大丈夫」

Vサインを作って、にこっと笑いました。

（挿し絵・小出　茂）

高尾山仏舎利塔
結縁牌懸仏のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安してある仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料
一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

高尾山の昆虫
オナガサナエ

139

中型のトンボにサナエトンボの仲間がいて、黒地に黄色い斑紋とエメラルドグリーンの複眼を有することが多く、その中にはコオニヤンマやウチワヤンマのように、ヤンマの名がつく大型種もいてオニヤンマの小型版のような雰囲気もありますが、複眼がヤンマのように大きくなく見分けは簡単です。

オナガサナエ（尾長早苗）は中型のサナエトンボで、体色的にはコオニヤンマに似ていますが、オスは尾の付属器が肥大し、ウチワヤンマにやや似た形状になるのが印象的です。

本種は五月頃から出現し、秋遅くまで見られます。一見するとヤンマのような力強さは感じませんが飛翔能力は比較的高く、ホバリングすることも少なくありません。

何故か警戒心が薄く、間近まで近づいても敏感に逃げることもなく、観察に向いた種だと言えるでしょう。日本特産種で高尾山では清流で出会うことができ、飛翔していたり杭や石にじっと止まっている姿を目撃できます。

尾の美しい形状から古代の翼竜の一種の尾を連想させ、優美なトンボだと思います。

（文 松島　孝　撮影 上村　雅昭）

多摩の伝統文化に親しむ

楽劇高尾山～平家美少年哀切譚～

鑑賞のお知らせ

五月二十九日、三十日に八王子市を含む、多摩地域の文化資源を活用し、伝統文化・芸能の魅力を発信する、**「伝承のたまてばこ～多摩伝統文化フェスティバル2021」**が開催されます。

伝統文化や芸能に馴染みのない方々も、気軽に親しめる多彩なプログラムがあり、その一つに、**「楽劇高尾山～平家美少年哀切譚～」**があります。

この演目は能の「経政（源平合戦で命を落とした若武者を弔う場面から始まる）」を能楽師の山中迓晶さんが舞い、高尾山の僧侶による声明（お経に節をつけて歌う）を加えた舞台となります。

鑑賞ご希望の方はお電話又はインターネットから、オンライン配信ご希望の方はインターネットからご予約下さい。

日　時　五月二十九日（土）十二時半開演
場　所　八王子市芸術文化会館（いちょうホール）大ホール
料　金　入場券千円、オンライン配信八百円
電話予約　公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団
☎〇四二－六二一－三〇〇五
インターネット　https://www.hachiojibunka.or.jp

山中迓晶さんによる「経政」
（写真撮影：吉村　登）

高尾山の僧侶による声明

高尾山 修行場めぐり 2

苦抜け門

男坂の頂上から有喜苑へ至る階段の上下には、「苦抜け門」という門があります。

仏教において苦は、「四苦八苦」という言葉で表されます。四苦とは、生まれること、老いること、病に侵されること、死ぬこと、という肉体的な苦を、それぞれ「生苦」「老苦」「病苦」「死苦」と言い、まとめて「生老病死」とも呼ばれます。

そして、お金や品物、地位、名誉等欲しいものが手に入らないと苦しむ「求不得苦」。精神や肉体が思い通りにならないと苦しむ「五蘊盛苦」。愛する人との別れを苦しむ「愛別離苦」。怨んだり憎んだりする人と出会う苦しみの「怨憎会苦」。この精神的な四つの苦しみを加えた八つの苦が、四苦八苦です。

苦しみは様々な欲望を叶えたいと願う「渇愛」、欲望に心が囚われる「執着」から生まれます。こうした苦の源になるものを断つためにも、苦抜け門を潜り、苦を遠ざける力を頂きましょう。

御護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方にお住まいの方や、感染症流行によりお参りできない御信徒皆さまのために、御護摩札の郵送もお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、高尾山薬王院の公式ホームページ内にあります「御護摩祈祷の御案内」からも、直接お申し込みすることが出来ますので、こちらも併せて御案内申し上げます。

ご不明な点等ございましたらお問い合わせ願います。

お問い合わせ先
TEL〇四二-六六一-二一一五
Fax〇四二-六六四-二九九
「郵送御護摩係」まで

高尾山のお護摩札とお供物

(大) 10,000円	
(中) 5,000円	
(小) 3,000円	
お護摩 3,000円以上	
お護摩 5,000円以上	
お護摩 10,000円以上	
特別大護摩 30,000円以上	
開帳大護摩 50,000円以上	
特別開帳大護摩 100,000円以上	

家内安全(家)
商業繁昌(商)
事業繁栄(事)
交通安全 車内用札(車・交)
交通安全 神棚用木札(木・交)
身上安全(身)
災難消除(災)
厄除(厄)
身体健全(体)
当病平愈(病)
開運(開)
良縁成就(縁)
安産成就(安)
入学成就(入)
心願成就(心)
御礼(礼)
奉納杉苗(杉)

お護摩の願事

お願い事は一体一願意とします。

併願(二願意)は、一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

(一月の時休全お書きください)

第百十七回　高尾山信徒峰中修行会　六月五日(土)・六日(日)

本年は【高尾山信徒峰中修行会】を、新型コロナウイルス感染症を考慮し、六月五日と六日の両日に、同様の内容で修行会を開催させて頂きます。

高尾山に広がる大自然を修行の道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される六凡行(業秤・穀断・水断・相撲・懺悔・延年)を体験してみませんか?

お山での修行は現代社会を生きる私たちが普段感じる不安や悩みなど、心の垢を少しずつ取り除き、生きる力や心の安心へと繋がります。老若男女問わず、初心者の方も歓迎致します。

修行会では感染症対策として、マスクの着用、検温の実施、室内の換気、アルコール消毒、内外問わず身体的距離の確保等を行いますので、参加者の皆様にはご協力をお願い申し上げます。

※当日は検温して頂き、体調が優れない時や、不安な時はご参加をお控え下さい。

※新型コロナウイルス感染症の状況により、行程の変更並びに、延期になる場合があります。あらかじめの御承知願います。

行程(両日共通)

8:00	高尾山麓不動院 集合・受付
8:30	開会式(六凡行説明)
9:30	業秤
10:00	回峰行
10:30	穀断
11:00	水断
12:00	小休止
12:15	相撲
12:40	法楽
12:45	昼食
13:30	出立
13:45	懺悔
14:10	延年
14:45	下山
16:00	柴燈大護摩供
17:00	閉会式

宛先　〒一九三-八六八六　八王子市高尾町二二七七　秀峰会宛

電話　〇四二-六六二-二一一五

FAX　〇四二-六六四-二九九

申し込み締め切り　五月二十八日(金)

参加費　一万円　＊保険料含

定員　三十名(両日とも)

申込み後、キャンセルの方は、早めに電話連絡を入れて下さい。

集合場所　高尾山麓不動院　午前八時集合

服装　運動着　運動靴(登山靴可)

持参品　雨具(カッパ、ポンチョ)　マスク(予備含)、タオル、リュックサック　筆記用具　＊お持ちの方は、念珠、錫杖をご持参下さい。

お申し込みについて

●ハガキに必要事項(郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・生年月日・電話番号・参加希望日)を明記してお送り下さい。

●参加希望日につきましては、御都合の良い日をお選び下さい。

●両日とも可能な方は、第一希望日と第二希望日を御設定下さい。

●お電話でのお申し込みは承りかねます。

●ご不明な点や、ご相談のある方、又は両日とも参加をご希望の方は、時間内(九時～十六時迄)に秀峰会までご連絡下さい。

※請書は締め切り後、発送致します。

院内散歩 51

～薬王院の展示物～

版画『青い山』　作：秋山巌

登山だより

■六月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

二日、十四日、二十六日
弁天様御縁日

八日
仏舎利詣り(仏舎利塔)

十五日、二十九日
御詠歌勉強会(十時山麓不動院)

十九日
納札供養柴燈大護摩供
(十三時祈祷殿広場)

二十六日
月例写経会
(十三時山麓不動院)

二十七日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

二十八日
奥之院開扉供養(十時奥之院)

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)

お知らせ

四月二十五日に発出されました、「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」が延長された場合、行事予定が変更となる場合があります。

最新の情報や行事の実施等につきましては、薬王院公式ホームページを御覧頂くか、お電話にてお問い合わせ願います。

御参拝を予定されている皆様におかれましては、各種予防対策の徹底を、お願い申し上げます。

毎日のお護摩奉修時間

(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味の御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日　午前九時(於大本堂)
御志納金　一口　三千円以上

大般若経を守護する十六善神の図

高尾山報助成金志納者

東村山市　福島　光子
昭島市　小町　高市
小平市　関　道雄
前橋市　㈱一　榮
八王子市　田中　芳美
〃　大久保サヨ子
大田区　平林　弘明
新座市　彰山　粧麗
富里市　森　照森
大田区　伊藤　泰白
八王子市　寺田　元信
〃　串田　展子
〃　小池　まり子
世田谷区　髙野　茂樹
熊谷市　石井　淳
日野市　中西　正夫
調布市　原　和子
秩父市　上原　幸江
八王子市　守屋　直
〃　天野　章雄
さいたま市　伊東　俊久
髙尾山健康登山者一同

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
髙尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115㈹
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

髙尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp